

幼児の観察研究

— 実現しようとする意志を育てること(1) —

津 守 真



保育研究の重要な方法としての観察法について述べてきた。

観察法は、そこで起こっていることをとらえる方法であり、保育担当者は、そこで観察したことをもとにして次の保育を考え、第三者の観察者はそれによって子どもの理解を深め、保育を考える手がかりとする。

今回は、具体的な現象をとり上げて、観察法について考察することにす。いずれも、子どもが何かを実現しようとする意志と関連する場面であるが、第一には、発達経験の観察、第二には、イメージの観察、第三には保育者自身の観察と、異なった観察法を用いている。観察は、観察した保育の内容と密接な関係をもっているので、両方の考察を同時にすすめる。

一、「安心すること」から「すてきにするこ」へ——実現の意志の出現過程

1 発達経験の観察記録

まず最初に、ここで考察する観察記録を掲げる。

三人の子どものドーフ粘土の場面の発達経験の観察

- ・ 安心してたのむ
- ・ 安心して水をいじる
- ・ 評価されないで能力に合ったことを思うようにやる(ドーフにさわること)
- ・ おちついて、いろいろつくることをたのしんでいる
- ・ 自分の思うようなものができて、それが承認される
- ・ 「すてーきにするの」といって、釘をドーフ粘土に包みこむ

・ 自分がすてきにしようと思っていたものの一部をとられると、とてもおこる

・ 妹のPは、すてきにつくっている姉をみると、それがとてもうらやましくなって、手を出す。自分で作るとはまだできな

この記録は、簡単なメモのような記録であるが、これが作ら

れた経過と考え方について最初に述べておきたい。

六歳、五歳、三歳の子どもたちが、ある日、ドーフ粘土を始めたとき、私は、子どもたちがそこで何を経験しているかを、できるだけそのまま感じとろうとする構えをもってはいった。その構えは、一方には、その場面に浸りきる面（そこにはおのずからにうける感動がある）と、他方に、子どもたちの中に起こっていることを、はっきりととらえようとする意識的な面とをもっている。そこで感じとって意識化したことが記録に残される。

このドーフ粘土の場面において、私が感じとったものがある。それは簡単に言葉にしてしまえない、微妙な内容をもつものであるが、記録に残すときには、その場で考えられる文字で記しておくことになる。このような記録のものになっていく「感じたもの」（正確にいうならば「感じさせられたもの」であり、これをイメージといってもよい）は、文字記録になっ ていなくとも、その観察をした本人には、いつまでも残っている、実際保育の面からいうならば、次に子どもに接するときの基盤となる。また、こうして「感じたもの」が集積されて、人の経験の核を形成する。子どもの側に視点を移しても同様である。子どもは、周囲の世界にふれて、感じるものがある。子どもが大人（保育者）にふれるとき、われわれが子どもにふれる

ときに感じるものがあるのと同様に、感じるものがある。それが子どもの中に集積されて、子どもの経験の核を形成する。

子どもと大人が同じ場面において、大人が感じるものがあるとき、それが核となって、大人の経験がつくられている。その同じ場面で、子どもにも感じるものがあるとき、そこに子どもの経験がつくられる。その両者は全く同じものとはいえない。しかし、ここでは、人は自分の意志によって感じるのではなく、他にふれて感じさせられるのである。大人は、子どもの感じているものと同型のものにふれているといっ てよいであろう。子どもの感じ方は多様であり、大人はそのある面にふれているにすぎないことは、常に心得ていなければならぬ。しかし、大人の恣意が減少する度合に應じて、子どもと同型のものにふれることができるといっ てよい。観察は、大人が子どもにふれたところでもつ大人自身の経験であるが、子どもの世界が全面的に自らの中にはいり込んでくる中でつくられる経験である。

2 安心すること

(1) 「安心してたのむ」「安心して水をいじる」

安心してたのむというのは、具体的行動としては、もつと粘土をちょうだい、水をいれてなど、言語を伴う行動である。私はそれに応じながら見ているのだが、私はそれを「子どもが「安心して」たのんでいると見ている。子どもは、それをことわら

れないかと思っているかのようにあり、私も子どもがたのんできたことに応じるつもりでいる。私は、ここで安心して大人に向かえる子どもの心の状態を、この一連の活動の中で重要なものとみている。

子どもが安心してたのむということは、大人の行動の背後に、安心して相談相手になってくれる人を見いだしていることである。大人との瞬間、瞬間の交渉の中に、自分がひろがっていくことの不安をもちながら、活動をひろげていくことのできる安心感が、ここでは優勢である。

私についていうと、私は子どもを安心して見ている。子どもが思うように、粘土や水をこねている中に、子どもの自身の世界が育つていくことを少しも疑わないで見ている。子どもが安心して大人を見るということが、大人の側から確認されるといえよう。大人の側と、子どもの側と、相互には微妙に対応するものがある。

安心して水をいじるということも、これと同様に見ることができよう。子どもは水をいじっているだけでなく、「安心して」いじっているのである。それは物との間の交渉であり、その全体は大人との関係に支えられている。安心して水との間の交渉にはいるとき、その間に生み出される子どものイメージは、予測をゆるさず、変化して動く。その性質については、この記録

から得られるものは少ない。別の観察をまたねばならぬ。(次項の水と砂と器をめぐるイメージの観察参照) 傍にいた保育者にもそのイメージはどのようなものであるか、わからぬことが多い。しかし、そこに自由に動くイメージがあることはたしかである。また、もしも、そこで大人に余裕があれば、大人自身のイメージをもつことができる。

「評価されないで、能力に合ったことを思うようにやる」という記録の表現は、より一層おとなの側に即している。「安心して」というのは評価しないこと、あるいは、子どもの状態に叶った評価である。「評価」や「能力」という語にとらわれて観察すると、このような記録の表現になるが、ここで起こっていることの本質に迫ることはならない。

このドーフ粘土の場面で、子どもが安心していられるということが、「すてーきにするの」という意志の出現の地盤になっている。いまそのことに進む前に、安心して何かをするという状態について明らかにしておかねばならない、というのは、「安心して」という日本語は、他国語に翻訳することが困難な語であって、そのもとにある経験は何であるかということがもう少し明らかにすることが、問題の進展に必要と思われる。

(2) 安心して何かをすることについて

安心して何かをすることが出来る状態は、子どもがそこから何かを始め、何かを生み出すのに重要なものであると私は思っている。ところが「安心する」という語は印欧語に対応する語を見出すことがむずかしい。英語でこれに対応する語をいくつか並べてみると、*to feel easy, to feel at home, to feel reassured, to be confident, without anxiety, with trust,* などがあり、文脈により異なった語が用いられている。一つには、*ease, rest* のように、緊張のゆるんだ状態を示す語がある。これをこの事例の安心体験に対応させると、後者の場合には、他人との間では緊張のない状態であるが、物や自分との間には、緊張関係がある。もう一つは *confident, conscience* にみるように、自分自身に対する信頼という場合がある。この事例の安心の場合には、自分との関係よりも、他人との関係に重点がある。その点では、*be trusted, be assured* が安心に近い。それは日本語の信頼をうけて、確信させられてに対応し、他人との関係が強く反映する。安心して何かをするという日本語であらわされる経験は、最初はしてよいかどうかわからない不安があり、大人との間でそれが解消し、物に対する自分の探索がゆるされ、その中

に自分の意志が出現する過程といえよう。その特長として、その状態が得られるか否かは、他人にかかる面が大きいことがあげられる。

英語の語にこれに対応するものがないということは、英語国民にはその経験は明瞭な輪郭をなしていないといつてよいであろう。少なくともはつきりと意識化されるに至っていない。西欧の人間関係においては個人が自分の空間と時間をもつことが前提となり、したがって物に対する自分の探索が可能にされているのに対して、日本では、子どもが自分で探索することのできる状況を、大人が保証してやらないとできないともいえよう。

3 「すてきにすること」

Aは、落着いていろいろ作ることをたのしんでいるうちに、自分の思うようなものができる。作っているものと、未来に作るうとするものとの間に距離がではじめる。Aは「すてきにすること」といって、釘をドーフに包みこむ。ながめ、自分で鑑賞し、またながめて、直したり並べたりする。

「すてきにすること」という言葉であらわされたことは、子どもの側に、何ものかを実現しようとする気持ちと意志があらわれたことを示す。実現しようとする輪郭が茫漠としていたときには、方向（気持ち）だけがあり、輪郭が明瞭になると意志となる。

意志の出現の過程と個性

「すてーきにするの」という意志が出現するのには、今まで述べてきたような前段階が必要である。すなわち、安心して素材ととりくみ、探索することが前にあって、そこから出る。そこには、子どもが思うように水やドーフをいじり、ためし、作る行為の空間があり、また、自分の速度で進む時間がある。このような子どもの動き——それは物理的な動きでもあり、精神の動きでもある——には、「感じること」が伴っている。水やドーフにふれて、Aはいろいろの感じの変化、すなわちイメージの動きを経験する。それが具体的にどのような性質のものであるのか、外から見たのではわからない。形となってあらわれるものから推測していくことはできるが、この記録ではごく限られた資料しかなく、それを明らかにするには別の資料にまたねばならぬ。

安心して水やドーフをいじめることは、イメージの動きを経験することである。大人からいうならば、ちらかす空間と、せかさないでゆとりのある時間を与えることといひ直すこともできる。安心してたのむ——安心して水をいじる——思うようにやる——落着いて作ることをしたのしむ……ということは、こうして、子どもとして十分にイメージをもつことができるというこ

とである。その後には、「すてーきにするの」ということがあらわれる。

感じること、すなわちイメージは、その人が感じるものであるから、個人にゆだねられたことである。イメージの内容が个性的であるように、そこから生じる意志は、その性質と、个性的である。この事例のみでなく、同様の例がいくつもあるが、それらを通して見ると、Aがすてきと思ひ、実現したいと思う内容には一貫性がある。その個性はAのものであるから、どのような環境でもある程度あらわれたであろうが、また、Aが安心して何かをすることのできる保育環境の中で養われたともいうことができる。そのような実現の意志を養うことは、人間として大切なことであり、教育の重要な課題である。

素材にふれて、それを探索しながら、自分の感じ方やイメージをもつことから、個性的な意志が生まれることを述べた。そのような経験をするにより、子どもは、その経験の前と後とは、異なった自分となっている。それは、自分の中に生まれるイメージを経験しつつ、自分らしい何ものかを実現する経験であり、そこに経験としての発達がある。それが発達経験であり、それは観察によって大人も経験することのできるものである。

(つづく)